

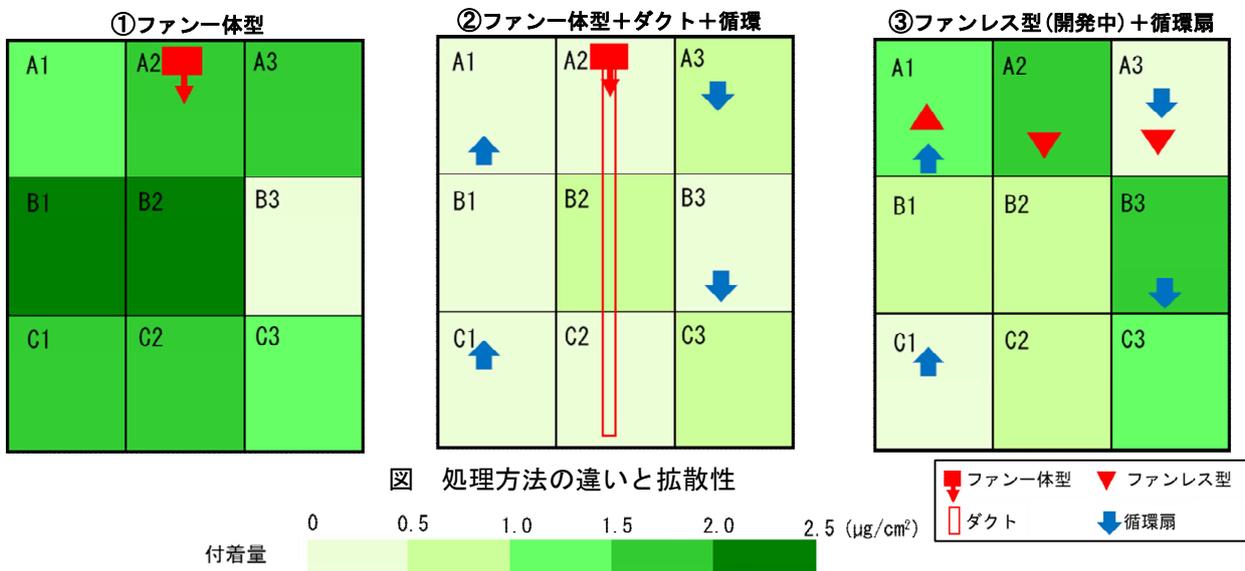
常温煙霧処理における施設内の拡散性①

—連棟ハウス、3つの処理方法—



写真1 常温煙霧装置

写真2 調査の様子



常温煙霧法は、高濃度の薬液を専用の機械で微粒子にして高圧で噴出する方法で、少量・省力散布できることに加え、使用者への安全性に優れることから、再び注目されています。使用する装置にはファン一体型およびファンレス型(開発中)があり(写真1)、ハウスの規模や形状により、ダクトを使用したり循環扇を併用したりと複数の使用方法があります。

そこで、(一社)日本植物防疫協会と協同で処理方法の違いによる拡散性、べと病に対する防除効果について試験を行いました。17aの3連棟キュウリハウスにおいて処理前にろ紙片(写真2)を9カ所に設置したのち、①ファン一体型のみ、②ファン一体型にダ

クトを装着し、さらに循環扇を併用、③ファンレス型(開発中)に循環扇を併用の3種類の処理方法でダコニール1000を処理し、各処理の翌日にろ紙を回収して付着量を調べました(図)。

いずれの処理方法もハウス内での拡散ムラはあり、付着量は①>③>②の順に多くなりました。一方、べと病に対する防除効果に差はなく、いずれも十分な効果が認められました。このように付着した農薬成分を調べることで拡散性を「見える化」することができます。今後もハウスの形状やハウス内環境、作物の繁茂状況や薬剤の違いなどの調査を行う予定です。

(農薬管理担当 島本 文子 088-863-4915)